ふれあいステーションほっと演芸会での鼻笛演奏（左）と、いろいろな種類の鼻笛（右）

鼻笛で人の輪を広げる

佐藤　眞一さん

さとう・しんいち
新富町西在住。
大道芸人。元由仁町職員。面白い楽器をやろうと思い立ち、独学で吹き方を習得した。全国各地で鼻笛の演奏をしている。まちおこしや青空コンサート、被災地応援イベント、第九コンサートなどに鼻笛で参加する。

鼻笛の音色で人と人とのつながりを

人森

大道芸人への道

鼻笛をご存じだろうか。鼻から出した空気を鼻笛を通し口の中に吹き入れ、口で共鳴させると音が出る楽器だ。素材は陶器や竹、黒檀*、プラスチック、紙とさまざま。素材によって音も微妙に違う。この珍しい楽器を使って、全国を股に掛けて演奏している人がいる。佐藤眞一さんだ。

鼻笛の他にも、のこぎりの背を弓でこする演奏と、南京玉すだれも行う。評判は広まり、市内のふれあいステーションほっとや地域交流ホームふれて、老人福祉施設などから呼ばれる。道内外の自治体にも出向く。「自分の演奏に聞き入ってくれる人が一人でも二人でもいるのがうれしいです」と大道芸の醍醐味を話す。

ある日、共演した漫談家の柳亭久楽さんから芸名をもらった。「お互いに久しく楽しむ」。大道芸人「柳亭互久楽」が誕生した。

人を楽しませる日々

お年寄りの前では「私の名前を聞くと、皆さんはありがたいこと（極楽）を想像するでしょうね」と笑いを取る。

即興で観客の要望にも応える。レパートリーは、懐かしのメロディーからクラシックまで幅広い。野外でウグイスの鳴き声を鼻笛で吹くと、本物のウグイスが縄張りを荒らされたと思い怒ったという。災害の募金会場では、「道行く人がいい音色だねとお金を入れてくれました」と話す。

こうしてあちこちの会場で演奏すると、ピアノ伴奏などで助けてくれる人が現れるのだそう。鼻笛はどこに行くにも持ち歩く。ポケットにもかばんにも入れてある。近所の子どもたちに「鼻笛のおじさん」と呼ばれ親しまれている。

芸を持とう

北広島に住んで32年。「人が温かい。つくづくいい所に住んだなあと思います」と顔をほころばせる。

佐藤さんの思い描く理想の北広島を聞いた。「一人一芸のまちですね。計算が速い、人の話を聞くのが上手、野菜作りや漬物を漬けるのがうまい。芸は何だっていい。そんなものと思うことが、他の人にとってはすごいことかもしれない。市民約6万人で6万芸でしょ？」。すてきなまちだ。

これからの願い

音楽に国境はない。鼻笛でみんながつながっていけるようにしたい。世界中の歌を覚えて、いろいろな国の人たちと仲良くなりたい。北広島に全国各地から鼻笛を持って、人が集まってきてくれる波を起こしたい。夢は膨らむ。

昨年、孫が生まれた。「鼻笛は面白いよって言って、一緒に吹きたいんです」。次世代にもこの芸を伝えていきたいと熱く語るその目には、人の喜ぶ顔をたくさん見てきた自信がみなぎっていた。

心に響く音色を

自由自在に鼻笛を操れる佐藤さん。鼻笛はどんな存在なのだろう。「手軽に楽しめて誰にでもできて、人との出会いや縁をもたらしてくれる宝物です」。鼻笛を通してたくさんの人と友達になってきた佐藤さんは、広い世界を捉えている。

リクエストに応えて、「もののけ姫」を吹いてくれた。人の心の琴線に触れる音色。いつまでも美しい旋律の余韻が響いていた。これからも多くの人の心に、鼻笛の奏でる温もりある音色を届けることだろう。

＊木の種類のひとつで、代表的な銘木。